

世界自然遺産 5 地域会議に寄せて

知床

<p>北海道斜里町 町長 馬場 隆</p>	<p>1951年、北海道斜里町生まれ。東京で就学・就職後、Uターンして漁業を継ぐ。町議会議員を経て2011年から町長。世界の宝、知床の価値を未来へ、子どもたちにつなげたい！</p>
<p>2005年7月、豊穡の海と多様な生き物を育む山々、両者をつなぐ川、それらが一体となった知床の生態系は、世界の宝として世界自然遺産に登録される。</p> <p>(1) 世界自然遺産登録以前～町が取り組む自然保護</p> <p>①しれとこ 100 平方メートル運動の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1977年、斜里町は「しれとこ 100 平方メートル運動」を開始、知床国立公園内の開拓跡地の保全と原生林の再生を目指し、買い取りに必要な寄付を募る。 ・1997年より「100 平方メートル運動の森・トラスト」へ発展を遂げ、原生の森と生態系の再生を目指した取り組みを継続。この運動に対する共感から、返品なしの寄付で今日に至る。 <p>②関係機関による普及活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知床博物館や知床財団などが環境教育を推進し、それらの活動が地域に根付いていた。 <p>(2) 世界自然遺産登録後～「ゴール」ではなく「さらなるステップ」へ</p> <p>①知床五湖における利用調整制度の導入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利用者の集中による歩道の荒廃、不特定多数の利用者とヒグマの軋轢等の課題対策として2011年から「高架木道」を新たに整備するとともに「利用調整地区制度」が導入される。 ・環境省・北海道・斜里町との役割分担の中で、町は本来の取り組むべきことに注力できる。 <p>②知床国立公園 ホロベツ園地再整備に向けて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知床五湖に一極集中している利用者を分散し、ホロベツ園地利用者の滞在時間延長、ニーズの多様化に対応する。 ・ホロベツを拠点とした魅力的なコンテンツの磨き上げと老朽化した施設の改修により園地全体の魅力向上を図り、世界遺産地域の価値向上につなげる。 	

<p>北海道羅臼町 町長 湊屋 稔</p>	<p>2015年4月羅臼町長就任2期目。「町民が幸福になるためのKプロジェクト」を推進。若手町民の参画による「知床らうすの未来を考えるアンダー60 創造会議」と、上の世代の町民がそれを支え助言し、住民自らで創り上げるまちづくりを進める。2020年5月には根室・オホーツク両管内自治体に呼び掛け7町の協力を得、自動車用ご当地ナンバー「知床」を導入。2021年3月、ゼロカーボンシティを宣言している。</p>
<p>①自然保護と暮らしの両立を目指した事例；知床が育む豊富な資源を生業とする水産業を基盤に発展してきた。知床沿岸部では、昆布、ウニ漁が盛ん行われ、更に知床の河川をめざし戻ってくる秋鮭、様々な資源は世界的評価を受けるものも有り、町の宝。資源を絶やさない取組も先人から脈々と受け継がれてきている。知床は日本の世界自然遺産で初めて海域が遺産地域に含まれる場所となったが、登録に際し自然と共存する産業活動はその制限は受けていない。国後島を望む根室海峡では、漁船と観光船等が同居する。海鳥が空を埋め尽くしシャチやクジラが悠然と海遊する様を目の当りにすることができ、正に自然と暮らしが共生する象徴的風景である。</p> <p>②自然保護と暮らしの両立にあたっての課題；問題グマが増加傾向にある。根底に人為的な行為に起因する人馴れも含まれ課題となっている。しかしながら野生動物管理計画を策定し、研究者、有識者の意見を頂き隣接地域を含む関係者連携のもと解決に向けた取り組みを模索する。</p> <p>③5地域会議への期待；自然環境と共にある人々の暮らしは、絶妙なバランス、調和を保ちながら今にある。これから先も密接にかかわり、崩れようとする相互の関係を修復しながら歩むものと思う。5地域はそれを永遠の課題としつつ、人の知恵と努力、自然の逞しさを推し量り悩み模索し続けてく使命がある。これらを念頭に豊かな自然を後世へ引き継いでいくことをテーマに据え、5地域が協力してふさわしい情報を発信していけると考えている。</p> <p>④大坂・関西万博の活用；日本には多くの美しい景観や文化があり、多くの人に関りその手で守られてきている。大阪をはじめ関西圏は、世界に誇る文化遺産、文化財を有する。これらと世界自然遺産は、日本の魅力を物語る重要な構成要素であると共に、これを守っている人々が居る。そこにスポットがあたり、活動を広く知って頂き、更にはその活動を引き継ごうとする人々の意思を育むことへと繋げていくことができればと考える。</p>	

世界自然遺産 5 地域会議に寄せて

<p>公益財団法人 知床財団 理事長 村田 良介</p>	<p>1954 年石川県で生まれ、愛知県で育つ。学生時代は考古学を専攻し知床博物館、公民館、環境保全課、教育長を経て 2016 年から現職。知床の山と沢と海をこよなく愛す。</p>
<p>○知床財団とは</p> <p>1988 年に斜里町が設立し、2006 年からは羅臼町も参画。6 人でスタートしたスタッフも現在は約 50 名。知床自然センター、知床五湖フィールドハウス、羅臼ビジターセンター、ルサフィールドハウスなどの施設運営や国立公園管理と適正利用、ヒグマ・エゾシカを中心にした野生鳥獣対策、調査研究活動などの受託業務と独自事業を行っています。また、斜里町による土地を保全し森林を再生する「しれとこ 100 平方メートル運動」の現地業務を担っています。</p> <p>○「知る、守る、伝える」活動</p> <p>知床の自然の本質を見極めてモニターしていく「知る活動」、調査研究の成果をベースに知床の自然環境を保全・管理していく「守る活動」、知床の自然のあり様やその貴重さを社会に発信していく「伝える活動」の 3 本の柱を基本に運営しています。</p> <p>○世界遺産地域の公益財団法人として</p> <p>近年は、行政機関に加えて地域の住民や団体や事業者を繋ぐ「サステナブルウィーク」といった世界遺産地域の環境と観光を生かすための事業を展開し、野生鳥獣対策や森林再生事業では企業 CSR や町内会やサークルの地域活動と連動した地域ならではの事業を発信しています。</p> <p>○新たなステップアップのために</p> <p>行政からの受託業務比重が大きいため販売収益や会員拡大による独自財源の確保による安定的な組織運営と「知床愛」溢れる人材の育成・確保が必要になっています。</p>	

白神山地

<p>青森県西目屋村 村長 桑田 豊昭</p>	<p>1957 年、青森県西目屋村生まれ、高校卒業後、県りんご試験場実習生を経て実家の農業を継ぐ。村農業委員、村議会議員を経て 2021 年から村長。白神山地を中心とした観光事業を推進し、自然環境の保護と雇用による住民生活の安定を図りたい。</p>
<p>白神山地を有する本村では、古くから白神山地の自然と共生してきたマタギ文化があり、その伝統文化の保存・伝承を目的に、地元のマタギらがガイド団体（白神マタギ舎）を設立、現在は語り部としてマタギ文化を通じて白神山地の魅力や価値を伝えており、エコツーリズム大賞や自然環境功労者環境大臣表彰を受賞するなど、その活動はエコツーリズムとして高く評価されています。</p> <p>加えて、村では鳥獣被害対策として捕獲した熊などの野生鳥獣を地域資源として活用するため、2020年に食肉加工施設「ジビエ工房白神」を整備し、マタギの命を無駄にしないという伝統文化を受け継ぎ、料理や革製品などへ無駄なく活用することで、観光客に白神山地の自然環境や歴史文化など、地域固有の魅力を伝え、地域ぐるみで白神山地の保全・利用につながる取り組みを行ってきたところです。</p> <p>しかしながら、2023年12月に白神山地が世界遺産に登録されてから30年を経過することから、登録直後に整備をしてきた様々な観光施設は経年劣化が見られ、設備等の更新が必要となってきたほか、近年、大雨など自然災害等も多くなってきており、遺産地域内の歩道整備についても費用がかさみ、観光客に世界遺産という自然環境の質を守り伝えていくための受入環境整備に係る費用の捻出が課題となってきました。</p> <p>今回設立されます5地域会議では、世界自然遺産を有する自治体として、共通課題を抱えているところも多くあるかと思われるため、他自治体の先進事例等を参考にし、本村の課題解決の一助としたいほか、大阪・関西万博への参加を契機とし、世界自然遺産で育まれた日本独自の生活様式や四季折々の景観美などを国外へ情報発信し、本村への誘客につながることを期待しております。</p>	

世界自然遺産 5 地域会議に寄せて

<p>青森県鱒ヶ沢町 町長 平田 衛</p>	<p>1959 年、青森県鱒ヶ沢町生まれ。東海大学文学部史学科卒業後、鱒ヶ沢町役場に勤務。2017 年より町長に就任。「活気のある賑やかなまち」、「子孫に託せる希望の持てるまち」を目指して町政に取り組んでいる。</p>
<p>白神山地の世界自然遺産登録以来、当町をはじめとする関係機関では自然環境の保護や保全、観光振興など様々な取り組みを行って参りました。</p> <p>また、白神山地が生み出す、きれいな空気と水、豊かな土壌は、我々の日々の生活と生業に大きな恩恵をもたらすとともに、それを内外にプロモーションすることで地域振興に大いにつながっています。</p> <p>奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島が世界自然遺産に登録されたことにより、世界自然遺産地域のネットワークが更に拡大されたことから、各自治体が抱えている課題の問題解決に向けて連携・協力していくことになりました。</p> <p>今、我々は地球規模での環境問題に直面していますが、「自然」、「森林環境」、「生態系」を有する白神山地をはじめ世界自然遺産を有する 5 地域が情報発信を強めることは、その解決に向けて大いに貢献することと思えます。1 つの自治体では実施できない新たな取り組みや事業展開などを期待しております。</p>	

<p>青森県深浦町 町長 吉田 満 (よした みつる)</p>	<p>1953 年、青森県深浦町生まれ。東京で学生生活の後、帰郷して農業を継ぐ。町議会議員を経て 2008 年町長に就任。日本一の大イチョウなど豊かな自然を後世に残していきたい。</p>
<p>毎年、白神山地の麓に位置する十二湖公園には多くの観光客が訪れ、また核心地域にそびえる白神岳はたくさんの登山客に親しまれております。</p> <p>町では、世界自然遺産白神山地、津軽国定公園十二湖及びその周辺地域の自然環境を紹介する「深浦町白神十二湖エコ・ミュージアム」において、自然保護思想の普及と白神山地の魅力発信に努めております。</p> <p>また、登山愛好者たちが設立したボランティア団体「白神倶楽部」により、白神岳登山道の保全、避難小屋やトイレの清掃などが行われ、環境整備に貢献しているほか、十二湖の自然を愛する方や野鳥の専門家たちが、ガイド団体「十二湖森の会」を結成。ツアーガイドとして十二湖の魅力や、自然保護を伝えております。</p> <p>ただ、これらの団体において会員の高齢化が進んでおり、今後人材不足などが不安視されています。人口減少の問題は、観光産業にも大きな影響を及ぼしていると言えます。</p> <p>このたび発足した世界自然遺産 5 地域会議の活動により、世界自然遺産が今まで以上に認知され、誘客促進とともに経済効果も上向くことで人材確保につながり、地域がより活性化することを期待しております。</p>	

世界自然遺産 5 地域会議に寄せて

**秋田県藤里町 町長
佐々木 文明**

1956 年秋田県藤里町生まれ。高校卒業と同時に藤里町役場に奉職。2011 年 8 月より藤里町長に就任。現在 3 期目の最終年となり、白神山地世界遺産 30 周年を盛大に盛り上げたい。

【白神山地の課題と突破に向けて】

▼遺産登録から 30 年、私たち基礎自治体はこれまで、環境省、林野庁、青森県、秋田県などの関係機関と協力して、保全とビジネスの両立に向けて取り組んでまいりました。そのような中で、私は現在白神圏域の 7 つの自治体の負担金で運営する”環白神エコツーリズム推進協議会”の会長を務めております。▼近年会員と共に真摯に議論を進め見えてきた課題があります。白神山地は世界自然遺産の中で、ただ一つ国立公園ではありません。法的に保全は担保されています。一方で利用推進部分の文言はあるものの具体的な政策が限られる、いわゆる制度の隙間に落ち込んだ状況となっています。近年、国が重点的に進めてきた国立公園満喫プロジェクトが進むにつれ、ほかの自然遺産地域との差は明らかになってきております。例えば、施設、展示設備の更新時期が到来し、最新の知見を取り込んだ展示更新を目論みたいとしても、国、県には所要の財源・計画がなく、政策的な支援も遅れをとっている状況です。▼もう一点、白神では周辺利用が必要と言われて続けているが、一体的に強力に進める主体が少なく、かつ推進財源がないという課題も顕在化しております。現在、その不足部分を埋めるべく、環白神エコツーリズム推進協議会が広域を代表し、数年前より各省への要望を行い、今後は、白神山地からの政策提言も行う必要を感じていたタイミングでの、この 5 地域会議の発足は非常に心強いものだと感じております。ぜひ連携での突破協力をお願いいたします。

【5 地域会議への期待】

5 地域会議のスケールを活かした相互の情報交換や実現力ある政策提言を期待したいと考えております。もう一つ、自然遺産と民間企業とのパートナーシップの定着を通じて、多様な財源を確保しながら、各世界自然遺産地域の持続につながる取組みが増えることを願っています。

**秋田県八峰町 町長
堀内 満也**

1976 年、秋田県八峰町生まれ。北里大学獣医畜産学部卒業後、県職員として勤務し、2022 年 12 月 21 日付で退職。その後、八峰町長選で当選を果たし、2023 年 1 月 9 日より町長に就任。町の人口減少を最重要課題として取り組み、「町民が安心して暮らせる町づくり」を目指す。

八峰町は、白神山地の秋田県西側の玄関口に位置し、緩衝地域に指定されている二ツ森には毎年多くの登山客が訪れます。二ツ森は、世界最大級のブナ林が一望できるとともに、駒ヶ岳、小岳、白神岳、岩木山などの山々や、雄大な日本海が遠望できます。

※2022 年 8 月の大雨の影響により通行止め。(復旧時期未定)

町の白神山地のインフォメーション施設である「八森ぶなっこランド」は、秋田杉を主体とした木造建築で、山峡の景観に溶け込んだ木造ドーム式の建物になっており、館内では、白神山地の成り立ちをはじめ、ブナ林の四季、生態、文化などについて学ぶことができます。また地域の遺産を次世代に守り継ぎ持続可能な発展に資することを目的に「八峰町白神ガイドの会」や「白神ネイチャー協会」が組織されているほか、八峰町全域が日本ジオパークに認定されており、日本で唯一、世界自然遺産と隣接するジオパークとなっています。

しかし、世界遺産登録から 30 年を経過し、施設の老朽化、近年の自然災害による関連道路や遊歩道の崩落に係る整備費が増加している状況であり、その費用捻出が課題となっています。

このたび発足した世界自然遺産地域 5 地域会議の活動により、他の地域で行われている先進的な事例を参考とさせていただきながら、共通する課題の情報共有を図り、課題解決に向けた手法を探っていきたいと考えています。

世界自然遺産 5 地域会議に寄せて

<p>秋田県能代市 市長 齊藤 滋宣</p>	<p>1953 年、北海道勇払郡厚真町出身。中央大学経済学部卒業。 代議士秘書を務めた後、秋田県議会議員 2 期、参議院議員 1 期を歴任し、能代市長に就任。</p>
<p>① 地域で見られる自然保護と暮らしの両立を目指した事例 豊かな自然を体験し、環境保全について考える機会とすべく、2020 年度 10 月に十二湖にて自然観察会を実施し、参加者からは好評を得ることができた。 年々、ニホンザル、ツキノワグマ、イノシシ、ニホンジカが目撃情報や農作物の被害が確認されている。能代市鳥獣被害防止計画より、実施隊による檻捕獲（止めさし）の実施並びに焼却処理を従来講じてきた。今後の取り組みの方針に「人身被害の防止と農作物被害の減少を目指す」ことや「繁殖による生息域拡大に伴う農林業被害や環境悪化を未然に防ぐため、予察的な捕獲を積極的に行う」ことをうたった、秋田県策定の「秋田県第二種特定鳥獣管理計画」に基づき、必要に応じて銃器や箱わなを使用して捕獲を行っている。2022 年度内において有害鳥獣捕獲を複数回実施している。</p> <p>② 自然保護と暮らしの両立に当たっての課題や悩み 自然観察会について、新規の受講者を増やすためにも新たな PR 方法の検討が必要だが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、募集人数を抑制せざるを得ない状況にある。 イノシシやニホンジカが目撃情報が増えてきており、今後、農作物被害がさらに発生する可能性がある。</p> <p>③ 5 地域会議への期待 各遺産地域の現状と課題・管理、今後の方向を整理し、地域課題の解決や地域の活性化に繋げていきたい。</p>	

小笠原諸島

<p>東京都小笠原村 村長 渋谷 正昭</p>	<p>学生時代にダイビングで小笠原に来島したことがきっかけで、1983 年小笠原村役場入庁。ホエールウォッチング事業の立ち上げに関わるなど、小笠原におけるエコツーリズムの振興にも携わってきた。2021 年 9 月より現職。</p>
<p>小笠原諸島は、国内の世界自然遺産地域の中では、唯一その成り立ちが海洋島であり、空を飛んで、風、鳥、波などによって運ばれた生物が、長い年月の中で独自の進化を遂げ、また進化途上の生態系から成る島々である。これらの生物が互に関係しあい、独自の生態系をつくり上げたことが評価され、世界自然遺産に登録されている。</p> <p>しかし、まだ 200 年にも満たない人の定住の歴史の中で、人そのもの、また人によりもたらされた外来生物により多くの固有生物が絶滅、または絶滅の危機に瀕しており、すでに外来生物の一部が小笠原諸島の生態系の一部を担うなど、単純に外来生物を除去するだけでは、小笠原の自然は守り切れない。ここですべてを紹介できないが、保全対策が進んで回復がみられる生物もいるが、一方で次々に新たな対策が必要になるなど、保全対策に携わる人々は苦労の連続にある。</p> <p>また、村民は世界自然遺産に登録されたことを誇りとし、後世に伝えるための責任ある行動が求められており、人為による遺産価値への影響は、来島者も含めて一定の制限は受容しなくてはならない。小笠原では登録前から進められていたエコツーリズムの振興によって培われた「自然を大切にしながら利用する」という意識が醸成され、各種自主ルールの制定につながっている。さらに世界自然遺産地域であることを謳った特産品のブランド化も進められている。</p> <p>次に、5 地域会議が開催されるにあたり、世界自然遺産地域がその価値を維持していくための課題やその解決方法は、それぞれに違いはあっても、この会議やネットワーク協議会を通して共有することで、新たな課題解決の道が開かれることを期待したい。</p> <p>さらに奄美・沖縄の登録により 22 自治体に数を増やしたことを力にし、国や都道府県に対する一層の予算確保、事業の推進などを働きかけていければと思っている。</p>	

世界自然遺産 5 地域会議に寄せて

屋久島

<p>鹿児島県屋久島町 町長 荒木 耕治</p>	<p>1950 年、鹿児島県上屋久町(現・屋久島町)生まれ。高校まで屋久島で過ごし、東京へ進学。その後 U ターンし 1995 年上屋久町議会議員選挙で初当選、上屋久町議会議長などを経て、2011 年 11 月より現職。自然も生活も心も豊かな島を目指す。</p>
<p>① 地域で見られる自然保護と暮らしの両立を目指した事例</p> <p>屋久島町では、海や山、川で多様な自然との人との付き合いが営まれてきました。その中で自然の保護をめぐる地域での葛藤や自然と人との共生をうたった「屋久島憲章」や「環境文化村構想」が誕生し、屋久島町の貴重な財産である自然資源を保全し、その自然と共にある人々の暮らし、すなわち環境文化を継承し有効に活用すること、そして、そこから生み出される恩恵を多くの来島者と分かち合い、心の豊かさ・感動・感謝し合う気持ちを大切に、持続的な地域づくりを行うことを目的としたエコツーリズムの推進を図っています。</p> <p>② 自然保護と暮らしの両立に当たっての課題や悩み</p> <p>屋久島では、世界自然遺産登録後に入込客が年々増加し、2007 年には 40 万人を超える状況となりました。屋久島観光のメインとも言うべき山岳地域では、登山道の荒廃や、混雑による良好な雰囲気喪失、既存トイレ設備の不足によるし尿処理の問題が発生し、軽装備や準備不足による山岳遭難事故の件数も増加しました。また、ウミガメの産卵についても、多くの観光客がウミガメ観察に訪れることから、影響を考慮したルールやマナーの啓発を行っていますが、遵守されていない場合があります。</p> <p>様々な関係機関で協力し、知恵を出し合いながら、問題解決を図ってきていますが、世界自然遺産登録から 30 年となる現在でも、解決に至っていない課題もあります。</p>	

<p>(公財) 屋久島環境文化財団 理事長 小野寺 浩</p>	<p>1973 年から環境省で自然保護行政に携わる。国土庁、鹿児島県出向時には国土計画、地域計画を、国立公園現地事務所にも勤務。計画課長として新生物多様性国家戦略を策定し、2005 年自然環境局長で退任。東大、鹿児島大に勤務した後、現職。</p>
<p>屋久島は 1993 (平成 5) 年 12 月に世界遺産に登録された。わが国第 1 号。当時はバブル経済の最中で、屋久島でもゴルフ場計画が 2 か所進行していた。当時、世界遺産条約は誰にも知られておらず、地元では登録されると木が 1 本も伐れなくなるという警戒感さえあった。</p> <p>屋久島では県の肝いりで自然を中核にした地域づくり「屋久島環境文化村構想」を策定中だった。自然保護を前面に押し出した地域づくりは、屋久島の個性を最大限に活かすものであり、それがすなわち持続的振興につながるという考え方である。1991 (平成 3) 年 4 月の第 1 回構想策定委員会で委員から「屋久島を是非世界遺産に」といわれて愕然としたことを鮮明に記憶している。一方、この委員会において、「共生と循環」という理念や「環境文化」という概念が提案された。「構想、計画」が力を持つには、徹底的な議論を通じた合意形成が必須要件であり、地元研究会など 3 つの委員会を完全な情報公開方式で実施した。</p> <p>登録後の世界遺産人気、観光人気の沸騰は予想をはるかに上回り、屋久島には観光客が押し寄せ、世界遺産登録を求める地域が続出した。</p> <p>当時の問題意識は、①新しい地域づくりの具体的提案をすること、②20 年遅れて参加した経済大国日本から世界にどういメッセージを発信していくことができるか、③また、屋久島は始まりであり、奄美、沖縄やんばるの自然保護にどうつなげていくかが大きな課題であった。</p> <p>さて、早くも 30 年が経った。実現できたことと、課題のまま残されてきたことがある。30 年を契機に、もう一度原点に戻って新たな取り組みを始めるべきだと考えている。世界自然遺産の 5 地域は、これまで様々な苦労と工夫を重ねてきた。これらを整理、分析して自然保護と地域振興の「両立モデル」をつくり上げ、2025 年開催の大阪万博などを通じ国内外に広く発信し、また直近のテーマとして、世界自然遺産 5 地域こそが SDGs の学習、企業研修に最適であることを各方面に強くアピールしていくことを考えたい。</p>	

世界自然遺産 5 地域会議に寄せて

奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島

鹿児島県奄美市 市長
安田 壮平

1979 年奄美市生まれ。東京に進学・就職後、28 歳で帰郷。NPO 法人や市議会議員を経て 2021 年 12 月市長就任。新しい時代に対応する未来都市・奄美市の実現に尽力したい。

自然保護と観光と地元住民の暮らしの両立について

ロードキル対策・オーバーツーリズム対策として環境省、鹿児島県、奄美市が主体となり利用ルールの運用を行っている。

「金作原」は奄美大島でも数少ない遺産地域内を散策できる場所として観光客から人気の高いスポット。ここでは認定ガイド（有料）の同行及び利用者数に制限設けるルール運用を行っている。

「市道三太郎線周辺」では国の特別天然記念物であるアマミノクロウサギをはじめとした希少な動物が多くみられ、ナイトツアーの場所として島民、観光客に知られている。ここでは、夜間のみ、道路を通行するにあたって事前予約とし車両台数の制限を行い、また通行する際も時速 10 キロ以内での通行をお願いする等のルール運用を行っている。

上記の保全ルールに関してはあくまでも自主ルールであり特に法的規制等はなく、道路を物理的に制限するなどの対策は行ってない。そのためルールを守らないもしくはルールを知らずに入る人がおり、特に島外からくる観光客への周知は喫緊の課題となっている。

鹿児島県大和村 村長
伊集院 幼

1961 年鹿児島県大和村生まれ。1981 年大和村役場に入庁し職員を経て、2009 年から現職。職員時代の経験を活かし「小さくとも光輝き続ける大和村」をスローガンに奄美初の温泉施設誘致など精力的に活躍中。

このたび世界自然遺産 5 地域会議が開催されますことを心よりお慶び申し上げます。奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島が世界自然遺産登録から 1 年がたち、新型コロナウイルス感染症の終息が見えない中ではありますが、私たちの周りでは多くの来訪者でにぎわいを取り戻しつつあります。本村には、大河ドラマ西郷どんの撮影地にもなった宮古崎をはじめ、世界自然遺産地域に隣接した森林公園 奄美フォレストポリスやコアエリアである奄美大島最高峰の湯湾岳など、評価された生物多様性をまさに表した自然環境を有しています。特に湯湾岳については、貴重な生物が多く生息・生育しており、また人々の信仰の対象となっていることから、地元自治体や関係機関と連携し利用ルールの施行をはじめました。奄美の自然環境の素晴らしさを多くの人々に伝えると同時に持続可能なかたちで利用することで、この自然環境を未来へ引き継ぐ我々の責務を果たしたいと思っています。

登録時に課された課題のひとつに上がっているアマミノクロウサギのロードキル対策については、村独自の対策を昨年より講じ効果の検証を行っており、併せてアマミノクロウサギ研究飼育施設（仮称）の整備に着手しています。本施設では、交通事故などで受傷した個体を保護、治療し十分なリハビリを行って野生復帰を目指す機能や、野生復帰が困難な個体の一部を展示し、フィールドへ行かなくとも本施設で観察して満足することでオーバーツーリズムやロードキルを抑制することを目的として施設整備を実施する予定です。

この度の世界自然遺産 5 地域会議では日本の世界自然遺産地域が連携し、本村はじめ各地域の取組を国内外へ広く知って頂く好機だととらえています。また、先進地の屋久島や白神山地はじめ各地の事例を学び、日本型自然保護のメッセージを皆様と共に世界に向けて発信していきたいと考えております。結びになりますが、開催にあたりご尽力いただきました公益財団法人屋久島環境財団はじめ関係者の皆様に厚く感謝申し上げます、開催に当たったの挨拶といたします。

世界自然遺産 5 地域会議に寄せて

鹿児島県宇検村 村長 元山 公知	1970 年、鹿児島県宇検村生まれ。東京、沖縄で就職後 U ターン。村議会議員を経て 2019 年から村長。素晴らしい自然や文化を守り、活かしながら次世代に繋いでいきたい。
<p>①地域でみられる自然保護と暮らしの両立を目指した事例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・湯湾岳登山に際し、少人数、ガイド帯同推奨の準保全ゾーンと立入禁止の保全ゾーンを設け湯湾岳利用のルールを作成した。 ・自然と暮らしを守るために、集落里歩きのルール決めなど村観光基本計画を今年度作成する。 ・現在村有地の草刈りや伐採作業の際にでた草木は粉碎して畑に敷くことを心がけている。 ・村内での堆肥の生産は、林業からでるバークを敷料として牛舎、鶏舎へ回し、バークと混ざった牛糞、鶏糞を回収し、原料調達から生産まで村内で循環で行ってきた。 <p>②自然保護と暮らしの両立にあたっての課題や悩み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界自然遺産登録の価値の認識よりも観光客増への不安が先走りしているのが悩みである。 ・焼内湾内のマキ貝は人気で需要が高いため、村漁協でルールを決めて漁民以外の漁を制限しているが、なかなか回復が見られない。制限以外の方策がないが課題である。 ・堆肥の生産から消費まで村内循環型を進めるため、村内資源の保護と活用のシステムづくりが課題である。 <p>③ 5 地域会議への期待</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 5 地域の成功事例や失敗事例から共に学び発展できることに期待する。 <p>④大阪・関西万博の活用（万博で国内・外にアピールしたいこと）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまで 1 市町村としての万博参加は考えられなかったが、世界に認められた自然や集落文化の価値を地元として再認識し、ありのままを PR していきたい。 <p>⑤万博への参加形態（アイデア等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各市町村の自然や行事、産業や人々の暮らしのドローン映像配信 ・稲すり踊りの体験コーナー（指笛、鼓、踊り）県の伝統芸能継承事業で参加者に好評を得た。 	

鹿児島県瀬戸内町 町長 鎌田 愛人 <small>（かまだ なるひと）</small>	1963 年、鹿児島県瀬戸内町生まれ。鹿児島で就学後、帰郷し建設業に従事。町議会議員を経て 2015 年町長就任。「環境を守り自然と調和したシマ」を次世代へ引き継ぎたい。
<p>【事例 1（海）】瀬戸内町は、1 つの町で海峡を有する全国唯一の自治体である。その「大島海峡」には、サンゴ礁やアマミホシゾラフグをはじめとした貴重な生きもの達が生息しており、近年、ダイビングやシュノーケリングスポットとして人気を集めている。</p> <p>以前から、ダイビング業者の団体が、投錨（とうびょう）等によるサンゴ礁破壊を防止するために「係留ブイ」の設置を独自で行っていたが、老朽化等の問題もあったため、ダイビング業者、シュノーケリング業者、漁業関係者、海上保安署、県、町等が連携して係留ブイの点検・補修と増設を行い、併せて海中清掃及び海岸清掃も実施した。</p> <p>【事例 2（陸）】本町には特定外来生物をはじめとした外来植物の繁茂している場所が数箇所あり、町内全域の生息場所と種類を把握するために外来植物生息マップの作成及び駆除活動を実施した。また、併せて希少野生植物の生息場所の把握及び、奄美大島本島内の利用分散を視野に入れた観光ルートの調査も実施した。</p> <p>外来植物の生息場所についてはマップや注意事項を記載したリーフレットを作成し、町内へ全戸配布して周知を図った。</p> <p>これら 2 つの事業には地方創生臨時交付金を活用し、新型コロナウイルス感染症の影響で観光客が減り、収入が減っている観光関連事業者の雇用・収入維持を図った。また、町民主体で行うことにより、機運の醸成に繋がった。</p>	

世界自然遺産 5 地域会議に寄せて

<p>鹿児島県龍郷町 町長 竹田 泰典</p>	<p>1951 年鹿児島県龍郷町生まれ。奄美大島の高校を卒業後、龍郷町役場へ入庁。役場職員、副町長を経て 2017 年から町長に就任し現在に至る。すばらしい龍郷町の自然・歴史文化をまもり・継承し、島内外へ PR していきたい。</p>
<p>①地域でみられる自然保護と暮らしの両立を目指した事例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住民に対して飼い猫の適正飼養についてのお願いや、外来野生動植物等の駆除や発生抑制などの取組を実施。 ・国指定重要無形民俗文化財「アラセツ行事」などの歴史文化を未来へつなげていけるようにするためにも現在の自然環境を保存・継承していきたい。 <p>③ 5 地域会議への期待</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度、沖縄・奄美が世界自然遺産登録されたことにより、私たちの龍郷町も周辺地域ということで「世界自然遺産 5 地域会議」に参加できることに大変感激しています。 <p>これを機に関係市町村はもちろんのこと、この会議に携わる企業の方々と連携を取りながら 5 つの世界自然遺産地域が発展することを期待します。</p>	

<p>鹿児島県徳之島町 町長 高岡 秀規</p>	<p>1959 年 12 月 10 日生まれ。町会議員を経て 2007 年から町長。鹿児島県町村会長。自然との共生の中で生まれた文化を後世へと引き継ぐとともに、生物多様性豊かな島の魅力を世界に発信したい。</p>
<p>奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島の遺産価値の保全にあたり、今後重要と考えられるのが、地域に暮らす人々の理解だと認識しています。</p> <p>屋久島、白神山地の 2 地域が遺産登録から 30 周年を迎え、今なお遺産の価値が適切に保たれている背景には、環境省をはじめとする関係機関の努力はもとより、そこに暮らす地域住民が世界自然遺産に誇りを持ち、保全と活用のバランスを図りながら地域振興を推進してきた過程があります。</p> <p>自然の豊かさを維持するとともに、自然とのふれあい活動を充実していくことで、担保体制を構築するとともに、次の時代を担う人材の育成に取り組んでまいり所存です。</p> <p>2022 年 12 月 16 日、奄美大島において開催されました会議において、アマミノクロウサギの生息数が回復しているとの報告がありました。</p> <p>それを裏付けるように、交通事故件数の急激に増加に加え、基幹産業である農作物への食害被害が顕著化しています。</p> <p>徳之島町としましては、アマミノクロウサギとの共生を目指した取り組みを進めるとともに、人と自然が密接する関わり合いの中で生まれた文化を地域振興へとつなげ、国内外へのアピール強化を図る考えです。</p>	

世界自然遺産 5 地域会議に寄せて

鹿児島県天城町 町長 森田 弘光	1951 年 6 月、天城町生まれ。明治大学政治経済学部卒業。1976 年天城町役場入庁。農政課長、総務課長などを歴任。2011 年天城町副町長選任。2018 年 12 月より現職（現在 2 期目）
<p>このたびは全国の世界自然遺産地域の方々が一堂に会し、世界自然遺産 5 地域会議が開催されますことを大変喜ばしく感じております。</p> <p>天城町では、世界自然遺産登録はゴールではなくスタートとして捉え、2019 年度から小・中学生を対象とした、世界自然遺産学習「あまぎ学」を実施しており、世界に誇れる自然・文化の継承に積極的に取り組んでおります。また、2022 年 3 月には、環境省と連携し、世界自然遺産のコアエリアを散策できる天城岳松原登山道を整備いたしました。空港から車でわずか 15 分と、世界自然遺産の森を気軽に体感できるスポットであることから島内外の利用者が増えつつあります。</p> <p>一方で、希少野生動物の交通事故（ロードキル）の増加などの課題にも直面しております。天城町では、島内で最もロードキルの発生が多かった県道 618 号線において、周辺集落の児童や保護者の協力を得て、防獣ネットや児童の手作りによる注意看板を設置するなど、地域と連携した対策の強化に努めております。また、山間部に位置する当部集落では、アマミノクロウサギの生息状況の回復に伴い、集落内へのアマミノクロウサギの出没が増え、時には家庭の庭木を食べる様子なども確認されております。今後は、人々の暮らしと希少野生動物とのより良い共存の在り方を検討していきたいと考えております。</p> <p>結びに、本会議の開催を契機として、世界自然遺産 5 地域の連携をより一層強化し、各地域における自然保護を核とした地域振興に寄与できる機会となりますことを期待しております。</p>	

鹿児島県伊仙町 町長 大久保 明	1954 年 8 月 2 日生まれ。徳之島徳洲会病院において院長を務めた後、鹿児島県議会議員を経て 2001 年から町長に就任 6 期目。世界に誇るふるさとの自然・文化を次世代に継承していきたい。
<p>徳之島には、豊かな自然や自然と共生してきた人々の暮らしの中で培われた伝統文化が色濃く残っています。</p> <p>遺産価値保全のため、国や県・関係市町村、関係団体と連携し、希少種の保護対策や侵略的外来種の防除、犬猫の適正飼養の呼びかけ等各種対策に取り組んでいます。</p> <p>遺産価値を損なうことなく次世代へ継承するためには、地域に暮らす人々の環境保全に対する理解が必要であると考えております。</p> <p>これまでの取組みを地域住民も参加できる形で強化・継続し、遺産価値が将来に亘り保全されていく体制の構築に取り組んでまいります。</p> <p>また、世界自然遺産としての知名度と発信力を活かし、この貴重な自然を守りつつ、町内各集落の伝統文化を保存・活用していくことで「環境文化型の世界自然遺産」として国内外に広く徳之島の魅力を発信できるのではないかと考えております。</p> <p>本会議の開催を契機に、世界自然遺産 5 地域の連携がより一層強化され、各地域における自然保護が推進されるとともに、各地域の持続的発展につながることを期待しております。</p>	

世界自然遺産 5 地域会議に寄せて

沖縄県国頭村 村長 知花 靖	1959 年、沖縄県国頭村生まれ、東京で就学後、国頭村役場に就職。企画課長、総務課長、副村長を経て 2020 年村長就任。世界自然遺産を子孫末裔まで世界の宝として引き継いでいく。
<p>沖縄島北部は古くから「やんばる」と呼ばれ、沖縄県北部の国頭村、大宜味村、東村の 3 村を指しております。「やんばる（山原）」とは、「山々が連なり森の広がる地域」を意味し自然が色濃く残っており、ヤンバルクイナを代表とした国際的にも希少な固有種が多数生息しています。</p> <p>これらの森林地域に生物多様性の保全上重要な地域として認められる中、希少種保全の課題として、希少種の密猟、ロードキル、外来種対策などの他、森林の適正な利用や、森林を案内するガイド養成やフィールドの利用ルールなどの保全担保措置の課題があります。</p> <p>このように世界自然遺産地域の保護、普及啓発をはじめ利用形態などの必要な措置が求められていることから、国、県、NPO など関係機関と連携して適切な保護保管理体制を確立していく必要があります。2018 年に「やんばる 3 村世界自然遺産推進協議会」を立ち上げております。</p> <p>また、保全管理を優先しながらも、世界遺産地域としての魅力ある観光地づくりを目指しており、観光協会や民間企業などと連携を図る活動を行っているところです。</p> <p>しかしながら、この遺産地域を次世代に未来永劫に引き継ぐためには、国立公園管理、野生動物管理、土地管理の他、保全管理の専門的人材の不足や財源の確保が課題となっており、遺産地域全体の保全管理を一元化する組織体制が必要と考えております。</p> <p>そのことから「5 地域」と連携し、遺産管理の情報共有を密にし、世界自然遺産地域の保全と利用の確立を図っていききたいと思います。</p> <p>遺産地域を重要な環境保全施策として、2025 日本国際博覧会へ参画は有益なことと思われまます。地球温暖化対策や SDGs の施策が叫ばれる昨今、世界遺産地域が持つ環境保全の重要性や魅力を世界へ発信することは大きな意義があると考えます。</p> <p>昨年、世界自然遺産に登録されましたが、ゴールではなくスタートだと思っております。</p>	

沖縄県大宜味村 村長 <small>ともよせ</small> 友寄 景善	1955 年生まれ、沖縄県大宜味村上原出身、1980 年村役場入りし、2011 年大宜味村教育長に就任、2018 年大宜味村議会議員就任、2022 年 10 月大宜味村長就任。大宜味村の自然環境の保全と負担を最小限に抑えながら各種事業を展開し、村の地域活性化を図っていききたい。
<p>大宜味村は、「やんばる」と呼ばれる沖縄本島の北部に位置し、国内でも特筆すべき生物多様性豊かな地域と言われています。ヤンバルクイナを始めとする重要な生物の生息・生育環境を保全して将来に引き継ぐため、2016 年には国立公園に指定され、2021 年 7 月 26 日には世界自然遺産に登録されました。</p> <p>大宜味村の中心部分には塩屋湾があり、そこで約 500 年の歴史がある国指定重要無形民俗文化財「塩屋湾のウングミ」（海神祭）がおこなわれており、その場所でカヌー体験や自然環境学習などが行われています。</p> <p>“やんばる”に残された自然は琉球政府時代から沖縄の本土復帰前まで続いた建築資材や薪炭材の生産、山畑として利用されることで暮らしの一部として守られてきた人里の森です。</p> <p>現在では、シークワサーやイトバショウの栽培によって山地や海辺の自然環境を生活の基盤として利用していますが、昔のような山の自然と地域の暮らしとのつながりは希薄となり里地の環境は変化してきました。自然環境を保護するための開発行為の規制は遵守しながら、生活の一部として森を活用することで里山環境が守られてきた歴史を振り返り、日常的に里地や集落周辺の身近な自然や川などにふれあい、山と森とつながる生活を取り戻すための取り組みが重要課題となっています。</p> <p>その中で、地域の環境保全として、地域住民・地元住民が主体となって密猟・盗掘防止とした林道パトロール、自然環境の保全管理として、特定外来植物ツルヒヨドリの駆除を行っており、今後も継続して関係機関や事業者、地元住民と連携しながら引き続き実施していきます。</p> <p>最後に、今回設立を予定している「世界自然遺産 5 地域会議」において、市町村及び関係機関、民間企業、活動団体が一体となって、今後の世界自然遺産地域が抱える問題・課題等の情報を共有し、充実した組織が構築されることを期待しています。</p>	

世界自然遺産 5 地域会議に寄せて

<p>沖縄県東村 村長 <small>とうやま まごのぶ</small> 富山 全伸</p>	<p>1948 年生まれ、沖縄県東村有銘出身、1973 年村役場入りし経済課長、会計管理者などを務め、2009 年退職。2019 年東村長就任。世界に誇るこの豊かな自然を後世に繋ぐため保全と利用の調和した地域活性化を図っていききたい。</p>
<p>東村は、「やんばる（山原）」と呼ばれる沖縄本島北部の東海岸に位置し、地域の 7 割以上を森林が占めており、その森林が育んだ水を貯える沖縄県民の水がめ「福地ダム」があります。</p> <p>国指定天然記念物「慶佐次湾のヒルギ林」におけるカヌー体験や自然環境学習の観光が盛んです。遺産地域をカヌーとトレッキングで楽しむ秘境ツアーを計画しており、保全と利用の両立を図る取組を実施してまいります。保全体験型コンテンツとして、地元住民が主体となって密猟・盗掘防止に取り組んできた林道パトロールを柱とした、新たな観光コンテンツも開発中です。</p> <p>また、持続可能な観光体験を提供するため、公認ガイド利用推進条例（仮称）を 2022 年度中の制定に向けて取り組んでいるところです。</p> <p>自然環境保全の取組みについては、国の特別天然記念物であるノグチゲラは、村の鳥として保護条例を制定し、適切な保護と生息域の保全・管理を行っています。</p> <p>課題としましては、特定の観光地には多くの方が訪れるため、自然環境への負荷による利用方法や保全部の配慮の他、特定外来種のツルヒヨドリが点在しており、駆除を行っていますが、労力や予算も有することから、関係機関や地元住民の協力を得ながら引き続き、実施してまいります。</p> <p>最後に、今回設立を予定している「世界自然遺産 5 地域会議」については、市町村及び関係機関のみならず、民間企業、活動団体が結集して設立されることから、今後の世界自然遺産の情報発信や先進的な取組、各地域が抱える課題等の情報共有がより一層、図れる組織として期待しています。</p>	

<p>沖縄県竹富町 町長 <small>たけとみ まさひと</small> 前泊 正人</p>	<p>1977 年沖縄県石垣市生まれ。千葉で就職後、U ターンし竹富町役場職員を経て 2022 年から町長。自然環境への負荷を低減させる持続可能な観光の仕組みづくり等を通じて、観光産業の高付加価値化、地域循環型経済の構築を目指す。</p>
<p>本町は、日本最大のサンゴ礁群である石西礁湖の海と西表島の山河等亜熱帯の雄大な自然環境に恵まれた 16 の島々からなる島嶼の町です。町のほぼ全域が国立公園や星空保護区に指定され、その豊かな自然環境の中で竹富島の種取祭や西表島の節祭等に代表される各島独自の伝統文化が育まれてきました。</p> <p>この豊かな自然環境や文化は町民のみならず多くの観光客にも楽しんでいただけていますが、一方で世界自然遺産に登録された西表島では、オーバーツーリズムやイリオモテヤマネコの交通事故等、観光管理や希少種の保全上の課題も生じてしまっています。</p> <p>これら課題解決のため、飼い猫のワクチン接種や飼養登録を義務付けるネコ飼養条例や自然ガイドの免許制度である観光案内人条例の制定、自然環境と文化の保全等を行う団体である西表財団の設立・運営支援等各種取組を進めてきたところですが、エコツーリズム推進法に基づく入域制限や、来訪者に一定の金銭的負担を義務付ける訪問税条例の制定等、未だ道半ばの取組もあります。</p> <p>また、日本最南端の町である本町は、世界自然遺産の先輩である 4 地域のみならず、他の世界遺産地域である奄美、徳之島、やんばるとも連携をとる機会は限られていました。この度の世界自然遺産 5 地域会議の場を活用させていただき、他地域としっかりと連携しながら課題解決の取組をより一層加速させていきたいと考えています。</p>	